

## 大坪併治著『訓点資料の研究』

小林 芳 規

研究成果を成書として公にする際に、先ず第一冊目理論篇によつて、理論体系を示し、次の二冊目資料篇によつて、その資料的基盤を示す、という順序は、戦後の訓読語研究者の常道となりつつある観がある。若し、資料篇の方を、第一に公刊する時には、訓読語研究が拡がりと深みとを持ちつつある現段階において、しかも未公表の訓点資料の多い現状では、先ず第一にどの種の資料が取上げられるかに、既にある意味では、評価が定まるであらうし、まして一・二の資料に限定する場合は、一層困難さを伴うに違いない。その資料が著者の研究体系の中で如何なる位置にあるか、又は進んでその体系がどうかを開陳することが必要となると考えられるからである。

近刊の大坪併治博士著「訓点資料の研究」は、同博士の前者「訓点語の研究」(昭和三十六年刊)に続き、資料篇として、「小川本願経四分律古点」(訓点語と訓点資料別刊第一、昭和三十一年)に次いで二冊目に当る。この度の「訓点資料の研究」に収められた資料は、竜光院蔵

妙法蓮華経古点七卷(八卷の中、卷第三欠)と天理大学図書館・京都国立博物館蔵 南海寄帰内法伝古点三卷(四卷の中、卷三欠)及び卷四の大平等欠)の二点である。妙法蓮華経古点は、真言宗高野山の中院流の始祖明算(一〇二一)の加点本であり、南海寄帰伝古点は、加點識語を欠いている為加点年時や加点者が不明であるが、「妙法蓮華経古点と同じく平安後期(院政初期を下らない)点本である。本書は、両資料の現存部分の全容を示し、これに解説を加えたものであつて、本文・訳文篇と解説・論考篇とから成り、卷末に語彙索引(本文・訳文篇から抽出した語彙)四十六頁を附す。本文・訳文篇は、先行同類書と同体裁で上段に原本の写真を掲げ、下段にその訓読文を配し、各々に原本の紙数毎に行数を付して対照の便をはかつている。妙法蓮華経古点七卷二三八頁、南海寄帰伝古点卷一・二の六十頁、卷四の四頁で、後者には別に声点例を抜出している。解説・論考篇は、「妙法蓮華経の訓点について」と「南海寄帰内法伝古点について」(共に紀要に既載のもの)の二部、

計百余頁より成つており、両資料それぞれに、始めに書誌的解題を略説し、続いて、一ヲコト点、二仮名、三漢字の義注、四音韻、五特殊な漢字の用法、六文法、七語彙、(寄帰伝には「加點事情」の項を加える)の各項を設けて、「注意すべき」事象を取上げてその概要を説いており、両資料共に最後に、訓点の特徴を要約して結んでいる。

両資料は、早くから学界に注目され、その中の幾つかの事象が、訓読語研究書や論文に引用されて来た。中でも、妙法蓮華經古点の「喪」は推量の助動詞「ム」の音価が[m]から[n]に変わった確例として屢々取上げられ、同種の論考の論拠とされることもあつたものである。又、遠藤嘉基博士の御紹介によつて同点の語彙や訓法の「鋭」「積」「鰥黒」や「為」「為」「為」等良く知られている。南海寄帰伝古点の、「縦横」「目驗」「目驗」「随分」「倉耳根」や「非スヨリは」等も注目される所であつた。これらが他の事象と共に、今度、全文中の文脈における正しい用法も知られるようになったのである。特に、先の「喪」は、実は「喪」の「ニ」(助動詞ヌの連用形)のn撥音便であり、「たり」のヲコト点を誤解し、且つ文意を読み誤つたものであつて、却つてこの古点の[m]と[n]とは表記上區別されていたという指摘(三三三頁)は、国語史上、今後何人も看過し難い修正である。その他、本書が平安後期の国語史的事実の一面を明らかにした功は少くない。

本文篇の写真の中、南海寄帰伝の卷二(大正十三年鳩居堂版複製)と卷四(昭和十八年六月古典保存会複製)とは既に精巧な写真複製本が

世に出ており研究者に利用されていたが、同卷一及び妙法蓮華經古点の本文写真の公表は、本書が始めてである。妙法蓮華經古点は、私も実物に就いて見たが、雄勁な本文漢字にふさわしい肉太の白点は鮮明であり、本書の本文写真にも明白に映つている。これに引換えて南海寄帰伝の朱点は映り難く、本書本文写真の卷二と卷四では、訓点の所在さえ分らない所が多いのは残念であるが、両卷の複製本の援用と本書の写真によつて、この二資料の現存全文が、座右において、検証しつつ利用することが可能となつたのは慶賀すべきことである。

従来、本文写真と訳読文とを対照させた形でその全文が公表された訓点資料は、平安初期の金光明最勝王經古点・地藏十輪經元慶七年点、平安中期の法華經玄贊古点、平安後期の法華義疏長保四年点・不空羼索神呪心經寬徳二年点、院政期の法華義疏長保四年点・大唐西域記長寛元年点であつて、本書は、一が平安後期の仏書点本の第三点目、一が伝記類点本として第三点目の資料を学界に提供したことになる。今後、国語史・訓読語研究等に有効に生かされるのは言うまでもないであろう。

さて、本書は資料そのものを提供することに主眼がある(序)よう、二資料が、著者の構築する「訓点語研究」、又は著者の抱く「訓点資料論」に占める位置などについては言残された。又、訓点資料が多量であり、且つ時代や資料の性格の差に基く相違や、同一内容の漢文でも宗派学統によつての相違を反映して多種であることの判明して来ている現状よりする、利用者への配慮など言及されな

かつた点も見受けられるので、この紙幅の範囲で三、四の卑見を加えさせて頂くことを許されたい。

本書の目的は「平安末期の国語資料」(序)を示す所であり、同著者の「新資料によつて国語史の空白を補う」(前著序)の同一線上にあると窺われる。本書の解説の項目、記述方法も前著と大同である。写真添附の訳説文を除けば、対象資料の、時代を下げ平安後期の訓読語は加点時の口語と密着面が強いので、そこに見られた事象を「生」のまま示すことが口語史に連なる可能性が大きい。平安後期に降ると、事情が異なつて来る。例えば、南海寄帰伝古点に数例現われる助詞「い」は、当代語からは姿を消した語である。

「効験」「目撃」等二字一訓の訓法も、当時としては、日本書紀古訓等に通じて珍しく、*n*韻尾の「一ニ」表記も古態である。又、妙法蓮華経古点の「唯然」訓法は、著者も指摘される如く、(三二七頁)、山田本妙法蓮華経方便品古点等平安初期の訓法に通じ、当期では直訳訓「唯然」(大日経天喜点)が普通なのである。このような古態の存在は、それぞれの經典の訓読の伝統・固定を内包とする訓読史から説明せられるべきものであつて、この配慮なく直ちに加点時の当代語とすることは出来ない。

妙法蓮華経の古点本は、管見に入つただけでも、平安初期点(「沙弥空海集」本)八巻を始め、鎌倉末期までに凡そ四十点上る。平安後期・院政期でも、法相宗興福寺系点(善多院点、立本寺本、第一群点白点)本(七巻は各科門前正彦氏が解説された)、真言宗高野山系点(中院僧正点、天台宗系点(藤南家経西整点二巻))

等系統の異なるものがあり訓法も相違している。これら法華経訓読史上の明算点の位置づけや、明算加点の他の点本日経天喜点・大日経供養次第法義疏康平点との総合的な比較検討に基く妙法蓮華経明算点の特性の解明が裏付となつて始めて、個々の事象が国語史の材料として真に生きて来ると考えられる。寄帰伝古点についても同断である。

法華経古点本の中で、何故明算点が選ばれたのか、この寄帰伝古点が何故選ばれたのか。平安後期諸点本の中から何故この二資料が選ばれたのか。十分に明らかでない。本書の解説・論考篇に採用された点本は、「高山寺本弥勒上生経賛朱点」(山田嘉道氏の題)・不空羼索神呪心経寛徳二年点など二十数点であつて、本資料の事象の傍証としてこれらから一二例程度引かれるが、それらの訓読語の体系・系統が示されず、従つて、それとの相関が不明であるから、本書二資料が「訓点資料の研究」資料の真の代表なのか疑が残るのである。

右の系統上の配慮は、「正確に解説」(序)する上にも影響して来る。例えば、(1)「喜(ひ)令めむ」(二〇二頁)は、「学(ひ)」(二〇二頁)と共に上二段活用とされている。確かにこの語は古くは上二段活用であり、漢籍訓読ではこの古形が鎌倉時代以後にも伝えられた為に、これに基き後世まで古形がそのまま続いた如く印象づけられた。しかし、仏書では、四段活用形も既に法華経玄奘平安中期点に見え、同じ妙法蓮華経の立本寺本寛治点にも「喜(不)一」とあるのである。この仏書点本の訓とはいはずれが正か、その考証過程を論考篇に期待したのであつた。

(2) 本書所収の二資料相互の訓読語が相違することは著者も予想された(序)。しかし具体的な比較研究は読者に委ねられたようである。ただその結果は当然、訳読文に反映すべきであつた。「欲」字は、寄帰伝古点には「存<sup>レ</sup>救<sup>セ</sup>むと欲<sup>ス</sup>とも」(二五四頁)等「ホス」の訓がある。妙法蓮華経古点には多例にも拘らずこの訓は一例もなく、(a)「むと欲<sup>ク</sup>」か(b)「むと欲<sup>ム</sup>」である。然るに訳読文では妙法蓮華経古点の(a)の類を「むと欲<sup>ス</sup>」と多々訓読している(系引によつても確かめられる)。「欲」の訓は、漢籍訓読用語で、漢訳仏典には一般に用いず、漢籍に近い文章を持つ伝記類点本で、「欲<sup>ム</sup>」「欲<sup>ク</sup>」に交つて、「欲<sup>ム</sup>」も少数用いられる(拙著「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究」三二六頁)。

寄帰伝古点のはその例なのである。従つてこの寄帰伝古点に見えた傍訓を漢訳仏典にも流用するのは訓読の系統を考えないものである。同様に、「ゴトクニ」「オモヘラク(「以為」。副詞様の訓)」「有<sup>ク</sup>」等の文末「之」の不読は、寄帰伝古点の方に偏る。妙法蓮華経古点で対応する訓は「ゴトク」「ト謂<sup>フ</sup>」「之」である。従つて、寄帰伝古点の「在<sup>ル</sup>日」(二六三頁)も、妙法蓮華経古点の「在<sup>ル</sup>日」(拙著)と同訓ではなく、漢籍訓読語としての「在<sup>ル</sup>」(三三八頁)の訓であり、「い」の補読は不要とならう。

(3) 縮流の中でも宗派の差に基く訓法の異なりも考慮すべきである。接統の助字「則」は、妙法蓮華経古点ではその例数十を越えるが皆不読のようである。但一例、訳読文では「信解せば則ち」(一六一頁)がある。所が写真によると、「ち」のヲコト点は見えない。恐らく「則(ち)」の誤植であろうが、真言宗の中にはこれを

「スナハチ」と読まず不読とする系統の存する(二三八頁)という行<sup>ス</sup>からは看過することが出来ないのである。同様に「於<sup>中</sup>」も見逃し難い。又、寄帰伝古点の「足り已<sup>ハ</sup>」(二五三頁)の訓法は、妙法蓮華経古点の「作<sup>シ</sup>」已<sup>ラ</sup>む(二六二頁)と対応し、当時は天台宗僧の点本に見掛ける。比叡山点の宝幢院点というヲコト点法使用が訓法と如何に相関するかの検討も必要となるのである。

(4) 又、訳読文作成には、平安時代の訓読語全体からの配慮も大切である。「然<sup>レ</sup>而<sup>モ</sup>」(二五六頁)、「然<sup>レ</sup>も而<sup>レ</sup>」(二八四頁)等、寄帰伝古点には総て「シカモ」とするが、「然而」は当時は「シカレドモ」と訓むのが鉄則である(語研四六一)。「斷<sup>ノ</sup>牙<sup>カ</sup>」(二五五頁)は、不空羂索神呪心経覚徳点に「斷<sup>ル</sup>」、大方広仏華嚴経卷三十四元慶点に「齒<sup>シ</sup>」とあり、観智院本類聚名義抄等古辞書にも「ハシシ」である。

解説論考篇は、本文訳文篇に附するものとしては、正確な解説の爲の諸問題を取上げ、その考証過程も示すべきであろう。本書での記述形式は、預め枠付けされた諸項目についてこの資料から用例を拾うという方法を採用した為に、言残された事象が目立つ。右の系統上の諸問題の外にも、「守<sup>ル</sup>ラクのみ」(二九三頁)、「戒<sup>を受</sup>」(三〇一頁)の規則(二四三頁)等、平安時代語法の枠外の事例や、索引に現れた「モットモ(最)」「ヒツサグ(携)」の促音介入音や、「ソソグ(灌)」「ツハヒラカナリ(詳)」「マタス(遣)」「カヒロク(動転)」等々の音の清濁にも、この形を採るならば一言欲しい所である。

「ミダリテ」の古用(三三二頁)、「キビシ」のク活用(三四四頁)は既に春日政治博士が説かれ(『穀研』B(二五八、二四五頁)、「説」<sup>トク</sup>「若」の呼応等も築島裕博士が述べられ(『語研』、「況」の文末呼応が平安中期以降一様化したことは拙論で、曾て述べた所である。これらの論が個々の資料で再び確かめられることは検証としての意味があろう。しかし、逆に個々の事象が、それを持つ資料の性格の解明のないままに、単に積重ねられるだけでは論に至らない。真の「訓点資料の研究」には、無論個々の資料の実態を踏まえるべきであるが、それに止まらず、資料性を、他との共通点、差異等を通じて普遍化する必要があると考えられる。その方法には、例えば動物学や考古学の先蹤の如く資料の分類、類型化が考えられようか。著者の前著にも伺えなかつた、この意味の資料論や訓点語理論をも今後に待望し、御自愛を祈る次第である。一(昭和四十四年四月三十日)(四十三年六月十五日刊 A4判四七二ページ 九八〇〇円 風間書房)

—— 広島大学助教授 ——